

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
「エイズ予防指針に基づく対策の推進のための研究」

分担研究報告書

社会分野における予防指針の課題に関する研究

研究分担者 塩野徳史 大阪青山大学 健康科学部看護学科 准教授

研究要旨 本年度は、モニタリング方法の一環として、一般成人を対象とした調査を実施し、日本の現状を明らかにし、先行研究の結果と比較検討した。調査は、先行研究で個別施策層向けに行われている調査項目を検討し、47都道府県と年齢階級によって層化し20歳から59歳の一般成人を比例配分し、その割合に基づき二段層化抽出法を用いて日本のインターネットサイトを運営するA社が保有するアンケートモニター登録者を対象に、過去1年間に、妊娠以外の目的で性交渉（セックス）をしたことがあると回答した人を対象に実施した。

本調査の有効回答は2,000人であり、男性1,011人、女性989人であった。このうち、同性と性交経験のある男性（MSM）は4.2%（成人男性のうち8.3%）、セックスワーカーは9.4%であった。HIV陽性であると回答した人は0.3%で全て男性であった。

HIV検査の受検経験は、これまでの受検経験が14.0%（2020）と15.0%（2022）であり、過去1年間では3.1%（2020）と4.2%（2022）であり著変はみられなかった。U=Uの認知割合は27.2%（2020）と28.1%（2022）であり著変はみられなかった。PrEPの認知割合は12.0%（2020）と17.7%（2022）であり微増していた。服薬意図がある人は26.1%（2020）と19.5%（2022）であり著変はみられなかった。これまでの使用経験は1.3%（2020）と3.5%（2022）であり微増していた。

分析ではHIV陽性であると回答した0.3%を除き「U=U」の認知および「U=U」の信頼度によって4群間においてクロス集計を行った。また、PrEPの認知および「PrEP」使用に対する認識によって4群間においてクロス集計を行った。比較のために「経口避妊薬」でも同様の集計を行った。

「U=U」に関して4群に分けて、認知や受け入れ状況を明らかにした。全体で「U=U」を知らないかつ信用していない人は41.7%、「U=U」を知らないかつ信用している人は30.4%、「U=U」を知っているかつ信用していない人は11.5%、「U=U」を知っているかつ信用している16.4%であり、信用している人の割合は、信用していない人の割合よりも低いことが示された。また、PrEPの認知および「PrEP」使用に対する認識では、全体で「PrEP」を知らないかつ一般的に使用は悪いと回答した人は44.6%、「PrEP」を知らないかつ一般的に使用は良いと回答した人は37.9%、「PrEP」を知っているかつ一般的に使用は悪いと回答した人は4.6%、「PrEP」を知っているかつ一般的に使用は良いと回答した人は12.9%であり、『経口避妊薬』の場合と比べると認知は低い、4群間の属性では同様の傾向を示していると考えられる。

A. 研究目的

世界におけるエイズ/HIV感染症を取り巻く状況は、抗ウイルス薬の多剤併用療法（ART）の飛躍的進歩によって、近年大きく変貌した。ARTの早期導入によって、HIV感染症の生命予後が著しく改善されるばかりでなく、パートナーへの感染予防効果も示され（Treatment as Prevention: TasP）、世界に大きなインパクトを与えた（Cohen MS et al., N Engl J Med. 2011）。このことは当事者コミュニティ側への影響も大きく、Undetectable = Untransmittable ; U=Uなどのメッセージ性の強い普及啓発が展開されるようになった。

一方、ART普及の効果について“ケアカスケード分析”がおこなわれ、米国においては、治療継続

の問題が明らかとなった（Gardner EM et al., Clin Infect Dis. 2011）。この“ケアカスケード分析”は、各国におけるAIDS対策の新たなよりどころとなり（UNAIDS. Fast-Track - Ending the AIDS epidemic by 2030, 2014）、我が国においても検査機会の拡大が叫ばれている。

また、抗ウイルス薬を用いた暴露前予防（Pre Exposure Prophylaxis: PrEP）の有効性が証明され、HIV感染ハイリスク群へのPrEP導入が、WHOによって推奨（WHO Guideline, 2015）されるようになり、改定されたエイズ予防指針にも明記された。

我が国におけるエイズ対策は、後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針（エイズ予防指針）に沿って展開されてきたが、その効果評価が

曖昧となっていることが課題となっている。そこで本研究の目的は改定されたエイズ予防指針に基づき、陽性者や予防啓発の対象となるコミュニティ当事者を取り巻く課題を明確にし、各種施策の効果を経年的に評価するとともに、一元的に進捗状況を把握し、課題抽出を行うことで、一貫したエイズ対策を推進するところにある。

社会医学系では、我が国におけるエイズ施策の状況を把握し、予防行動やリスク行動のベースラインとするために、一般成人を対象として、先行研究で個別施策層向けに行われている調査項目と内容を一致させ、経年的にアンケート調査を実施する。その結果をもとに、HIV 陽性者や MSM、セックスワーカー、薬物使用者を対象にした他の調査の結果や当事者および支援団体と、PrEP 導入を踏まえた日本におけるコンビネーション HIV 予防の普及に関して、ウイズコロナ時代に対応した取り組みを討議する。

B. 研究方法

一般成人調査は、先行研究で個別施策層向けに行われている調査項目を検討し、日本のインターネットサイトを運営する A 社が保有するアンケートモニター登録者を対象に、居住地と年齢階級の二段層化抽出法を用いて質問紙調査を 2022 年 3 月に実施した。調査方法は 47 都道府県と年齢階級によって層化し 20 歳から 59 歳の一般成人を比例配分し、その割合に基づき A 社保有のモニター登録者のうち過去 1 年間に、妊娠以外の目的で性交渉（セックス）をしたことがあると回答した 2,000 人を対象に実施した。

本調査の質問項目は婚姻状況、HIV や性感染症に関する知識、過去 6 ヶ月間の HIV やエイズに関する対話経験、検査行動、性感染症既往歴、U=U の認知、PrEP に関する経験などを尋ね、分析では HIV 陽性であると回答した 0.3%を除き「U=U」の認知および「U=U」の信頼度によって 4 群間にわけてクロス集計を行った。また、PrEP の認知および「PrEP」使用に対する認識によって 4 群間にわけてクロス集計を行った。比較のために「経口避妊薬」でも同様の集計を行った。これらの分析はカイ 2 乗検定を用いて検討した。有意水準を 5%未満とした。データの集計および統計処理には IBM SPSS Statistics 23 (Windows) を用いた。

(倫理面への配慮)

本研究実施については大阪青山大学研究倫理審査委員会より承認を得た。

C. 研究結果

1) 基本属性

本調査の有効回答は 2,000 人であり、男性 1,011 人、女性 989 人であった。このうち、同性と性交渉のある男性は 84 人 (男性のうちの 8.3%)、女性は 65 人 (女性のうちの 6.5%) であった。またこれまでに相手からお金をもらって性交渉をした経験を有するものは男性 80 人 (男性のうち 7.9%)、女性 108 人 (女性のうちの 10.9%) であった。また PrEP の経験がある人は 68 人であり、全体では 3.4%であった。個別施策層としては MSM84 人 (全体の 4.2%)、セックスワーカー (以下、SW) 188 人 (全体の 9.4%) であった。HIV 陽性であると回答した人は 6 人 (全体の 0.3%) で全て男性であった。これまでの HIV 検査経験は全体で 15.0%であり、MSM42.9%、SW40.4%であった。

U=U の認知は「よく知っている」が 2.9%、「少し知っている」が 6.6%であり、「あまり知らない」が 18.6%であり、MSM では合わせて 52.4%、SW では合わせて 50.0%と他の群より高かった。「U=U」について、あなたはどのように感じますかと尋ねたところ、「信用している」「どちらかという信用している」と回答した人は 47.0%であり、MSM では 64.3%、SW では 45.3%であった。

PrEP に関しては「とてもよく知っている」が 3.8%であり、「具体的には知らないが、聞いたことはある」が 13.9%であった。MSM では合わせて 57.1%、SW では合わせて 15.0%であった。HIV 陽性であった人を除き、使用経験は過去現在の使用を合わせて 3.4%で、MSM22.2%、SW1.4%であった。使用経験のある 68 名のうち、購入先についてはインターネットが 55.9%、友人からが 52.9%、国内の医療機関が 7.4%であった。

また「服薬したい/どちらかといえば服薬したい」と回答した人は全体で 19.5% (n=389) であり、その理由で最も高かったのは「安心してセックスを楽しみたいから (42.9%)」、次いで「自分が HIV に感染する可能性があるから (27.0%)」「自分一人のできる予防方法だから (26.7%)」「相手が HIV に感染しているかどうかわからないから (26.5%)」「効果的な予防方法だと思うから (26.0%)」「生で (コンドームを使わずに) セックスしたいから (18.3%)」「パートナーや友人が心配するから (16.7%)」であった。

もし、あなたが「HIV 感染予防のためのセックス前の服薬 (PrEP、プレップ)」を使用した場合、コンドームの使用に影響すると思いますかと尋ねたところ、コンドームを今より使うようになると思うと回答した人は 11.6%であり、コンドームを今より使わなくなると思うと回答した人は 14.3%、変わらない・わからないと回答した人は 74.1%であった。

一般的に、「HIV 感染予防のためのセックス前の服薬 (PrEP、プレップ)」を使用することをどう思

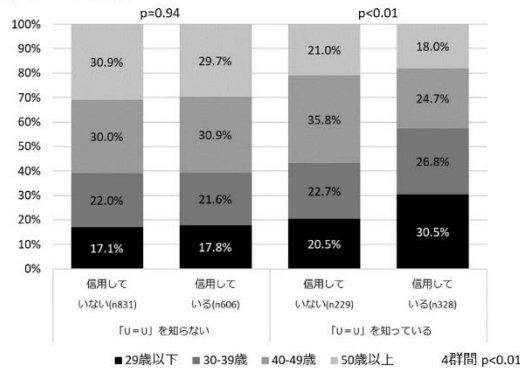
いますかと尋ねたところ、「良い」「どちらかという
と良い」と回答した人は 50.9%、MSM66.7%、SW50.1%
であった。一方で、経口避妊薬に関しては「知っている」と回答した人は 94.5%であり、MSM91.7%、
SW94.3%であった。一般的に、ピル（経口避妊薬）
を使用することをどう思いますかと尋ねたところ、
「良い」「どちらかというと良い」と回答した人は
64.0%、MSM67.9%、SW63.4%であった。

2) U=U に関する検討

これ以降の分析では HIV 陽性を除く 1994 名を対
象に分析を行った。「U=U」の認知および「U=U」の
信頼度によって「U=U」を知らないかつ信用してい
ない（A 群；n=831）、「U=U」を知らないかつ信用し
ている（B 群；n=606）、「U=U」を知っているかつ信
用していない（C 群；n=229）「U=U」を知っているか
つ信用している（D 群；n=328）の 4 群間において
クロス集計を行った。

年齢層は全体で 29 歳以下 19.9%、30-39 歳 22.8%、
40-49 歳 30.0%、50 歳以上 27.3%であり、A 群 B 群
で有意差はみられず（p=0.94）、C 群 D 群では信用
していると回答した人で、29 歳以下の割合が高く、
50 歳以上の割合が低かった（p<0.01）。（図 1）

図1 年齢層



居住地の特性は全体で中心市街地 31.4%、郊外住
宅地 62.1%、その他（農村・漁村・山間部離島）6.5%
であり、A 群 B 群で有意差はみられず（p=0.31）、C
群 D 群では信用していると回答した人で、中心市
街地の割合が高かった（p=0.02）。また居住形態は
全体で独居 22.4%、同居 77.4%、定住している家
はない 0.2%であり、A 群 B 群で有意差はみられず
（p=0.69）、C 群 D 群では信用していると回答した
人で、独居の割合が高かった（p=0.03）。（図 2、図
3）

図2 お住まいの地域はどのような地域ですか。

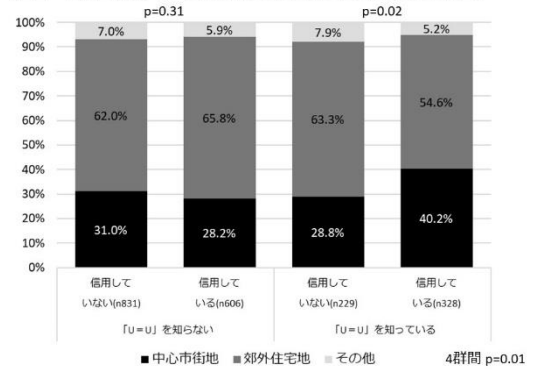
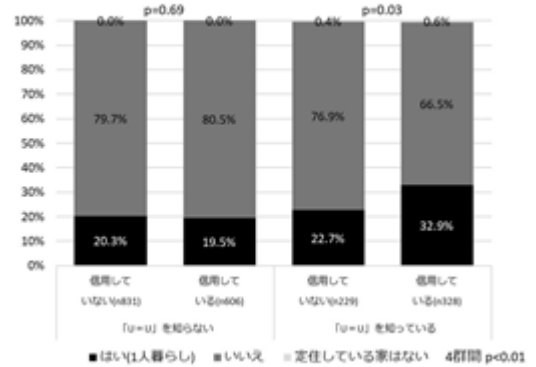
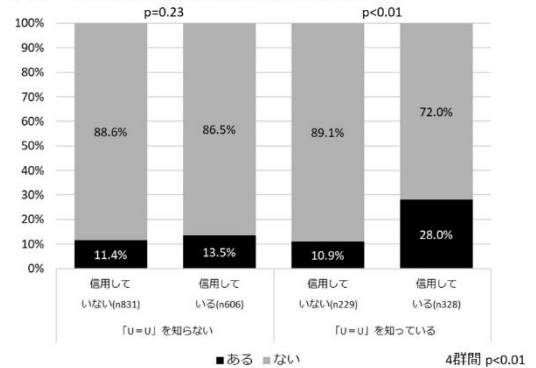


図3 あなたは、現在、一人暮らしですか。



HIV 抗体検査受検経験ではこれまでの受検経験
があると回答した人は、全体で 14.7%であり、A 群
B 群で有意差はみられず（p=0.23）、C 群 D 群では信
用していると回答した人で、経験ありの割合が高
かった（p<0.01）。（図 4）

図4 これまでのHIV抗体検査受検経験



性感染症の既往ではこれまでの経験があると回
答した人は、全体で 13.1%であり、A 群 B 群で有意
差はみられず（p=0.53）、C 群 D 群では信用してい
ると回答した人で、経験ありの割合が高かった
（p<0.01）。（図 5）

図5 これまでの性感染症既往

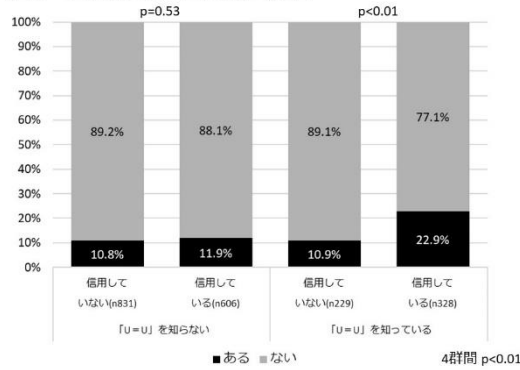
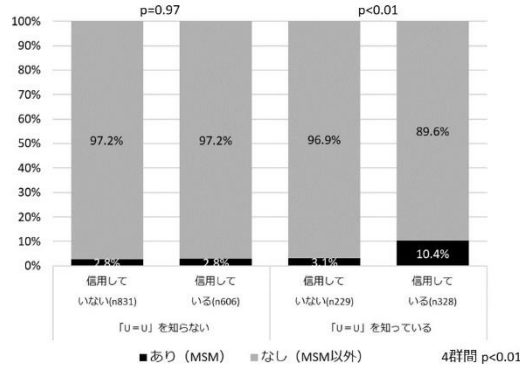
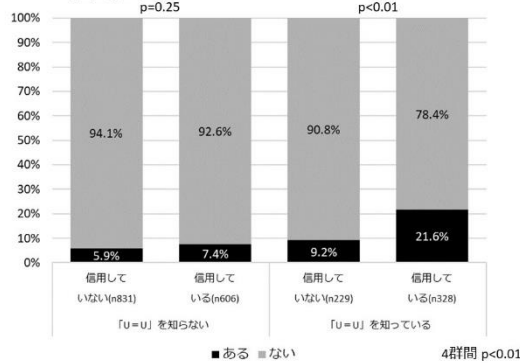


図6 これまでの男性同性間での性交経験



個別施策層 (MSM, SW) の割合では、MSM は全体で 4.1% であり、A 群 B 群で有意差はみられず (p=0.97)、C 群 D 群では信用していると回答した人で、MSM の割合が高かった (p<0.01)。SW は全体で 9.3% であり、同様に A 群 B 群で有意差はみられず (p=0.25)、C 群 D 群では信用していると回答した人で、SW の割合が高かった (p<0.01)。(図 6、図 7)

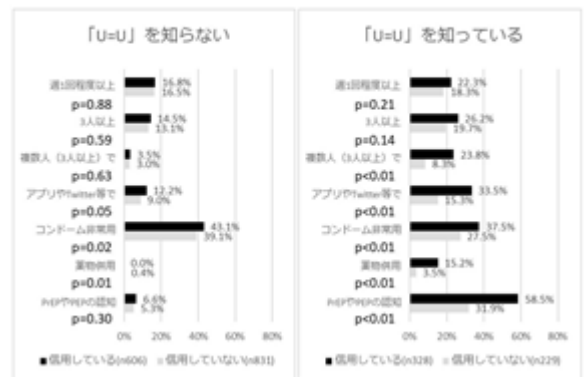
図7 これまでの相手からお金をもらった性交渉経験



過去 1 年間の妊娠以外の目的での性行動で、感染リスクが高いと言われている 6 項目 (週 1 回以上の性行動、相手の人数が 3 人以上、同時に 3 人以上の複数での性行動、アプリや twitter 等で出会った相手との性行動、コンドーム非常用 (p=0.02)、薬物併用 (p=0.01) で有意差がみられ、信用していると回答した人で非常用の割合が高く、ばっ起薬を含めると薬物を併用した人の割合が高

かった。C 群 D 群では週 1 回以上の性行動、相手の人数が 3 人以上を除くすべての項目で有意差がみられ、信用していると回答した人で感染リスク行動の割合が高かった。(図 8)

図8 過去1年間の妊娠以外の目的での性行動



過去 1 年間の対話経験は、A 群 B 群で有意差はほとんどみられず、C 群 D 群では両親・兄弟、恋人、友達、セックスした相手、医療関係者のすべての相手で有意差がみられ、信用していると回答した人で対話経験がある割合が高かった。(図 9)

図9 過去1年間のHIVやエイズについての対話経験

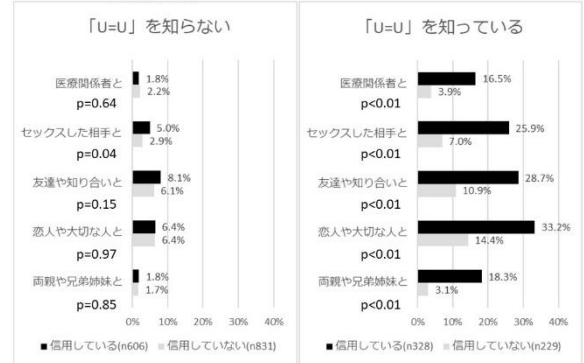
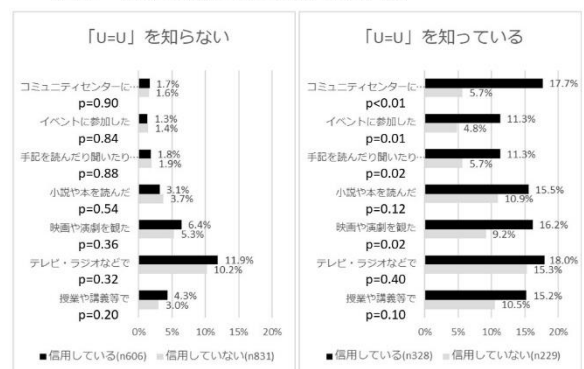


図10 HIVに関わるこれまでの経験



また HIV に関わるこれまでの経験については、A 群 B 群で有意差はみられず、C 群 D 群では「HIV 陽性者が登場する映画や演劇を観た (p=0.02)」「HIV 陽性者当事者の書いた手記を読んだり聞いたりした (p=0.01)」「HIV にかかわるイベントに参加した (p=0.01)」「予防啓発に取り組んでいるコミュニティセンター (全国 6 カ所のいずれか) に行った (p<0.01)」で有意差がみられ、信用していると回答

した人で経験が何度かある割合が高かった。(図 10)
 3) PrEP に関する検討

次に、PrEP の認知および「PrEP」使用に対する認識によって、「PrEP」を知らないかつ一般的に使用は悪い (A 群; n=889)、「PrEP」を知らないかつ一般的に使用は良い (B 群; n=756)、「PrEP」を知っているかつ一般的に使用は悪い (C 群; n=92)「PrEP」を知っているかつ一般的に使用は良い (D 群; n=257) の 4 群間にわけてクロス集計を行った。比較検討の材料として、同様の集計を『経口避妊薬』でも行い、A' 群(n=79)、B' 群(n=31)、C' 群(n=641)、D' 群(n=1243)で示した。ここでは PrEP に焦点をあてて報告する。

年齢層は A 群 B 群で有意差がみられ (p<0.01)、一般的に悪いと回答した A 群で 40 歳以上の割合が高かった。C 群 D 群では有意差はみられなかった (p=0.08)。(図 11、図 12)

図 11 年齢層

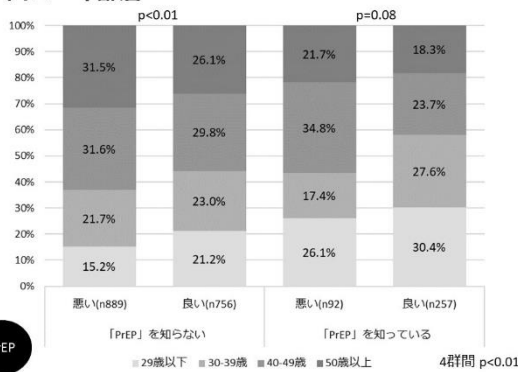


図 12 年齢層

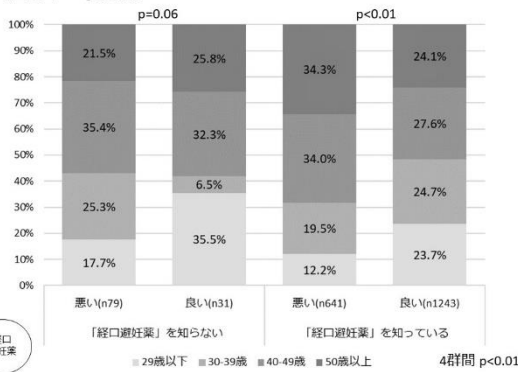


図 13 お住まいの地域はどのような地域ですか。

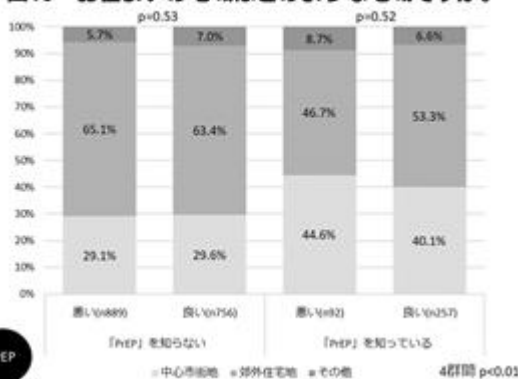
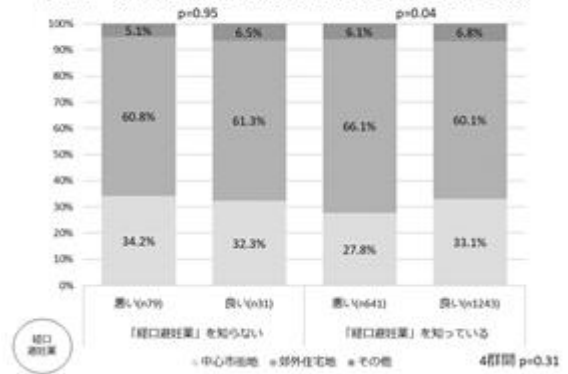


図 14 お住まいの地域はどのような地域ですか。



居住地の特性は A 群 B 群で有意差はみられず (p=0.53)、C 群 D 群でも有意差はみられなかった (p=0.52) が、4 群間では有意差がみられ (p<0.1)、知っている と回答した人で、中心市街地の割合が高かった。(図 13、図 14)

過去 1 年間の妊娠以外の目的での性行動で、感染リスクが高いと言われている 6 項目と PrEP の使用経験を 4 群間で比較したところ、A 群 B 群ではコンドーム非常用 (p<0.01)、薬物併用 (p=0.02) で有意差がみられ、一般的に良いと回答した人で非常用の割合が高く、ぼっ起薬を含めると薬物を併用した人の割合が高かった。C 群 D 群でもコンドーム非常用 (p<0.01) で有意差がみられ、一般的に良いと回答した人で非常用の割合が高かった。(図 15)

図 15 過去1年間の妊娠以外の目的での性行動

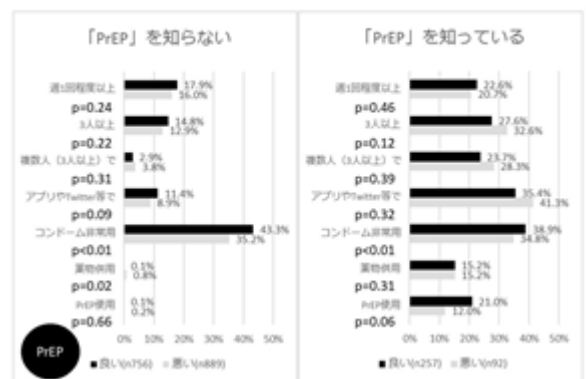
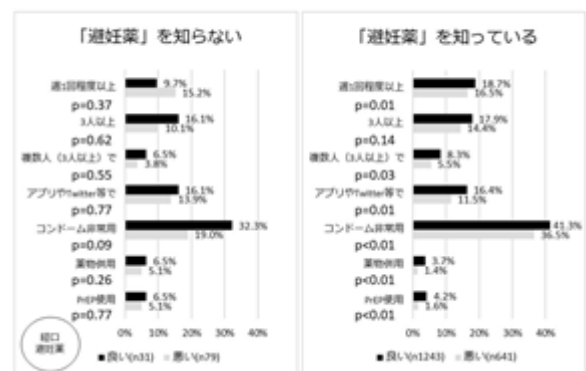


図 16 過去1年間の妊娠以外の目的での性行動



『経口避妊薬』の場合でも、C' 群 D' 群では相手の人数が 3 人以上を除くすべての項目で有意差がみられ一般的に良いと回答した人で感染リスク

行動および PrEP の使用割合が高かった。(図 16)

図17 過去1年間のHIVやエイズについての対話経験

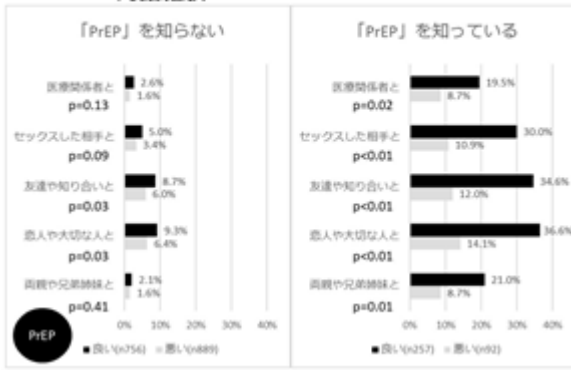
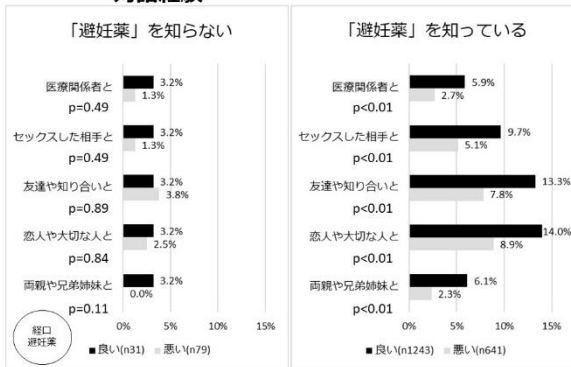


図18 過去1年間のHIVやエイズについての対話経験



過去1年間の対話経験は、A群B群では恋人、友達で有意差がみられ、一般的に良いと回答した人で対話経験がある割合がやや高かった。C群D群では両親・兄弟、恋人、友達、セックスした相手、医療関係者のすべての相手で有意差がみられ、一般的に良いと回答した人で対話経験がある割合が高かった。『経口避妊薬』の場合でも同様の傾向であった。(図17、図18)

HIVに関わるこれまでの経験については、A群B群で「HIV陽性者が登場する映画や演劇を観た(p=0.01)」有意差がみられ、一般的に良いと回答した人で何度かある割合がやや高かった。

C群D群では「テレビ・ラジオなどでHIV陽性者に関する番組を視聴した(p=0.03)」で有意差がみられ、一般的に良いと回答した人で何度かある割合がやや高かった。

図19 HIVに関わるこれまでの経験

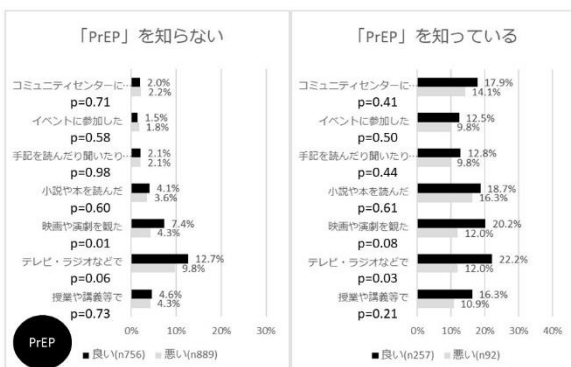
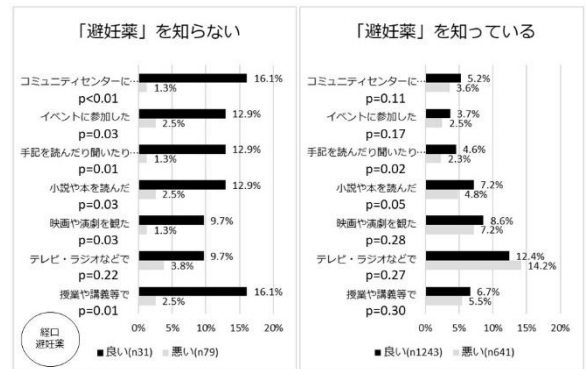


図20 HIVに関わるこれまでの経験



『経口避妊薬』の場合でも同様の傾向であり、「授業や講義等でHIV陽性者当事者の生の話を聞いた(p=0.01)」「HIV陽性者が登場する映画や演劇を観た(p=0.03)」「HIV陽性者が登場する小説や本を読んだ(p=0.03)」「HIV陽性者当事者の書いた手記を読んだり聞いたりした(p=0.01)」「HIVにかかわるイベントに参加した(p=0.03)」「予防啓発に取り組んでいるコミュニティセンター(全国6カ所のいずれか)に行った(p<0.01)」では知らないとは回答したA'群B'群でも、一般的に良いと回答した人で何度かある割合がやや高かった。C'群D'群ではほとんど有意差はみられなかったが一般的に良いと回答した人で何度かある割合がやや高い傾向であった。(図19、図20)

D. 考察

本年度は、モニタリング方法の一環として、一般成人を対象とした調査を実施し、日本の現状を明らかにし、先行研究の結果と比較検討した。本調査は対象を性行為経験者に限定したことで数値のわずかな変動がみられたものの、基本属性の居住地や年齢層、既婚割合は国勢調査とほぼ同じ割合を示しており、MSM割合、SW割合もほぼ同じ割合であったため、先行研究との比較は可能であると考えられる。

HIV検査の受検経験は、これまでの受検経験が14.0% (2020年12月, n=1,984)と15.0% (2022年3月, n=2,000)であり、過去1年間では3.1% (2020年12月)と4.2% (2022年3月)であり著変はみられなかった。

U=Uの認知割合は「よく知っている・少し知っている・あまり知らない」を合わせて27.2% (2020)と28.1% (2022)であり著変はみられなかった。

PrEPの認知割合は「とてもよく知っている・具体的には知らないが、聞いたことはある」を合わせて12.0% (2020)と17.7% (2022)であり微増していた。「服薬したい・どちらかといえば、服薬したい」と回答する人は合わせて26.1% (2020)と19.5% (2022)であり著変はみられなかった。これまでの使用経験は1.3% (2020)と3.5% (2022)であり微増していた。

今年度は「U=U」に関して4群に分けて、認知や受け入れ状況を明らかにした。全体で「U=U」を知らないかつ信用していない人は41.7%、「U=U」を知らないかつ信用している人は30.4%、「U=U」を知っているかつ信用していない人は11.5%、「U=U」を知っているかつ信用している16.4%であり、信用している人の割合は、信用していない人の割合よりも低く、浸透しているとは言いがたい。

「U=U」を認知しており、信用していると回答した人では、他群に比べ、MSM割合やSW割合が高く、過去1年間で感染リスク行動を経験している割合も高かった。そのため、徐々にハイリスク層に情報が浸透してきていると思われる。また対話経験やHIVに関するこれまでの経験が何度かあると回答する人の割合も高く、特に、「HIV陽性者が登場する映画や演劇を観た(p=0.02)」や「HIV陽性者当事者の書いた手記を読んだり聞いたりした(p=0.02)」などの感情移入を主体としたもの、「HIVにかかわるイベントに参加した(p=0.01)」や「予防啓発に取り組んでいるコミュニティセンター(全国6カ所のいずれか)に行った(p<0.01)」など行動を伴うような啓発介入では肯定的な感情とともに情報が伝えられる可能性が考えられる。そのため、わが国で進められてきた「Living together」のメッセージ性やHIV感染のREAL、可視化等は「U=U」をさらに浸透していくために有効であると考えられる。

また、PrEPの認知および「PrEP」使用に対する認識による4群間を比較検討した。全体で「PrEP」を知らないかつ一般的に使用は悪いと回答した人は44.6%、「PrEP」を知らないかつ一般的に使用は良いと回答した人は37.9%、「PrEP」を知っているかつ一般的に使用は悪いと回答した人は4.6%、「PrEP」を知っているかつ一般的に使用は良いと回答した人は12.9%であり、『経口避妊薬』の場合と比べると認知は低いが、4群間の属性では同様の傾向を示していると考えられる。

概ね、経口避妊薬やPrEP等のコンビネーション予防におけるBiomedical Approachの受け入れは、若年層や中心市街地(都市部)に住む独居の人で肯定的に受け入れられ、時代や世代交代とともに社会全体に浸透していくと予測されるが、情報に最初に触れたときの印象がその先の印象にも影響を及ぼすことが考えられる。本調査の結果では、過去1年間の対話経験は、両親・兄弟、恋人、友達、セックスした相手、医療関係者のすべての相手で有意差がみられ、一般的に良いと回答した人で対話経験がある割合が高く、『経口避妊薬』の場合でも同様の傾向であった。そのため周囲の規範が受け入れの状況に関連している可能性が高く、その点でPrEPに関する情報とメリット・デメリットはより多くの人に浸透させることが重要であるとともに、対話しやすい環境やメッセージ性を意識する

必要がある。一方で、HIVに関わるこれまでの経験については、受け入れ状況に、あまり有意差はみられず、わが国においてはPrEPの導入の準備段階であり、一部にしか情報が浸透していないことが影響している可能性がある。『経口避妊薬』の場合では、HIVに関わる経験を有している人の割合が、一般的に良いと回答している人の方が高く、周囲の理解とともに当事者からストーリー性を持って情報を伝えていくことが必要と考えられる。

C群D群では「テレビ・ラジオなどでHIV陽性者に関する番組を視聴した(p=0.03)」で有意差がみられ、一般的に良いと回答した人で何度かある割合がやや高かった。

E. 結論

U=Uの浸透はいまだに低い一方で、PrEP使用割合は増えてきていることが示唆される。U=UやPrEPの啓発に関しては、感染リスクの高い一部の層で普及しつつあるが、今後も周囲の規範を意識しつつ、当事者やコミュニティの中から広げていくことが必要であると考えられる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 宮田りりい, ○塩野徳史, 金子代. MSM(Men who have sex with men)に割り当てられるトランスジェンダーを対象とするHIV/AIDS予防啓発に向けた一考察-ハッテン場利用経験のある女装者2名の事例から. 日本エイズ学会誌, 23(1):18-25, 2021
- 2) 金子典代, ○塩野徳史: コミュニティセンターに来場するゲイ・バイセクシュアル男性のHIV・エイズの最新情報の認知度とHIV検査経験, コンドーム使用との関連. 日本エイズ学会誌, 23(2), 78-86, 2021

2. 学会発表

- 1) ○塩野徳史. コミュニティと予防介入の新たな戦略. 日本エイズ学会 2021年 東京
- 2) ○塩野徳史. HIV予防とヘルスリテラシー. 日本エイズ学会 2020年 千葉

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む.)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし